

## 宮武正道の「語学道楽」

——趣味人と帝国日本——

黒 岩 康 博

【要約】 奈良の言語研究者宮武正道は、従来マレー語の専門家と考えられていたが、残された旧蔵資料を見ると、彼がマレー語に至るまでに辿った「語学道楽」の跡が明らかになった。中学校時代、切手蒐集の延長として始めたエスペラントに対する熱意は、奈良エスペラント会を発足させ、機関誌『E』(『E』)を生み出す。該語を飽くまで社交の道具と見做す宮武主宰の同会には、パオよりの留学生エラケツも参加していたが、宮武は彼からパオ語で多くの民話を聞き取り、『南洋パオ島の伝説と民謡』を上梓する。この一時期は土俗の研究へと傾いたが、昭和七年七月のインドネシア旅行以降、マレー語を本格的に研究し始める。当初はマレー語の新聞・雑誌を読むことを念頭に置いていたが、日本の南進政策がマレー語圏にも及ぶと、カナの普及やローマ字綴りの日本風改革を提唱するようになる。こうして書齋から出た好事家は、最後タガログ語辞書の完成を待たずに夭逝した。

史料 九四卷一号 二〇一一年一月

### はじめに

大阪言語学会の創設者で、関西大学・龍谷大学等で教鞭を執った石濱純太郎は、ある追悼文集中、「にぶき良心で」と題する一文でこう述べた。

彼は或時私にこう言った事がある。学問にはもとより良心がなければならないが、にぶき良心がいいのではないか。余りするどい良

心である、一生何ものもしでかさないで、却って学問の爲にならないのではないか。どうせほんたうに完成したような成績はそうあるわけではない。だから例え未完成のものでも良心には少し咎めても何かの点に一步を進めているならば、完成は将来の増補によることとして、にぶき良心でぐんぐん仕事をして行く。その方が学会の爲であると思う。だから自分は南方諸言語の研究もにぶき良心でやるんだ。彼の澁刺たる言葉を再現する力は私には無いが、こんな風の意味をまくしたてたのであった。<sup>①</sup>

研究者にとって非常に有り難い、否心強いこの発言を遺した「彼」とは、奈良県の言語研究者宮武正道（大正元年～昭和一九年）である。奈良市西御門町で製墨を生業とする佐十郎・てるの長男として誕生した正道は、生家春松園の経済力にも支えられて一生を学問に費やし、自費出版も含めて三〇冊以上の著書を世に送り出した。これは、良い意味で、まさしく「にぶき良心」の賜と言えよう。こうした世に顕著なはずの宮武の業績についての先行研究は、非常に僅少なながらも存在するが、右文集中の「馬來語の宮武」<sup>②</sup>と題する回顧に端的に示されているように、従来は彼のマレー語（ムラユ語・馬來語）<sup>③</sup>研究にのみ焦点が当てられてきた。<sup>④</sup>しかし、表1や『大和百年の歩み 社会・人物編』<sup>⑤</sup>の記述からも分かるように、該語の研究は、アラビア語・エスペラント・パラオ語などを遍歴した末にたどり着いた地平であり、今回奈良市立史料保存館が所蔵する「宮武家旧蔵資料」（以下宮武家資料と略）を調査することにより、宮武のそうした研究遍歴を資料をもとに追うことが出来た。以下本稿では、それら同館の資料や宮武の著作物を駆使し、第一章ではその生い立ちとエスペラント研究会での活動を、第二章ではパラオ人留学生との出会いとパラオの言語・土俗<sup>⑥</sup>の研究を、第三章では常に「実用性」を求めたマレー語研究を取り上げて、分析する。そして、好事家的な知的営為であったはずの宮武の言語研究が、エスペラントのような「国際語」とパラオ語のような「民族語」の間を漂ううちに、いつの間にか現実社会と接点を持つことになる、というその過程を明らかにしたい。それはまた、帝国日本が抱え込むこととなった他民族の存在に、市井の間が如何に向き合ったか、という視点を得ることに繋がるであらう。

① 宮武タツエ編『宮武正道 追想』同、一九九三年、五頁。

② 同上、三九頁。

③ オーストロネシア語族に属し、マラッカ海峡地域の交易・宗教活動などに用いられたマレー語は、マレーシア・インドネシアの独立後、両国の国語となった。本稿では引用部分を除き、英語読みの「マレー語」を用いた。

④ 宮武の業績について、『近代日本言語史再考——帝国化する「日本語」と「言語問題」——』(三元社、二〇〇〇年) などではほぼ唯一学術的に言及している安田敏朗も、宮武を「マレー文化・文学の研究家」(安田敏朗『帝国日本の言語編制』世織書房、一九九七年、四四〇頁)としている。

⑤ 大和タイムス社、一九七二年、六四九～六五二頁。近代大和の人物について、同書に学ぶところは多い。

## 第一章 エスペラント

### 第一節 切手蒐集からエスペラントへ

「はじめに」でも少し触れたが、宮武は若草山麓にも売店を持ち、「古梅園に次ぐ製墨問屋であつた」<sup>①</sup>春松園を生家として生まれた(表1)。八代目当主の父佐十郎は、金春流能楽を能くし、自宅に能舞台までも拵えた粹人で、昭和一二年六月皇太后が奈良県に行啓した際、薪能「春日龍神」を台覧に供した程であつた。<sup>②</sup>子の正道も、この資質を受け継いだものと見え、成長するに従い「趣味人」然とし始める。奈良県師範学校附属の幼稚園・小学校を卒え、大正一四年四月、宮武は奈良県立奈良中学校(現県立奈良高校)へ入学するが、そこで最初の蒐集癖が切手に対し爆発することとなる。「中学時代の切手蒐集熱は異常なまでに昂じていたと聞く」<sup>③</sup>という回想の一端は、宮武家資料の「蒐集用古郵券直輸入商」林勇スタンブ商会の封筒内に収められた使用済み葉書の料額印面コレクションからも窺えるが、乾健治編『大和蒐集家人名

⑥ 辞書的定義では、「土俗」とは「各地の風俗や言い伝え・伝説・方言などをさして、主として明治から大正時代にかけての人類学研究で使われた用語」で、一九〇〇年代以降、日本のエスノグラフィーの対象地域が、台湾・朝鮮半島を経て太平洋の諸地域へと移ると、「土俗学」に代わって「民族学」という用語が使われるようになる(福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典』下、吉川弘文館、二〇〇〇年、二一九～二二〇頁)とするが、宮武は昭和戦前期に刊行された自らの著作物において、内外問わず「土俗」「土俗研究」という語を用いており、本稿もその使用法に従った。

表1 宮武正道略年譜

年 月 日	事 項
大元 9/ 6	奈良市西御門町八番屋敷に、宮武佐十郎・てるの長男として誕生。父佐十郎は製墨業春松園8代目当主、鶴齋と号し、金春流の謡曲師であった
8 3	奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）附属幼稚園修了
4	奈良県師範学校附属小学校入学
14 3	同上校卒業
4	奈良県立奈良中学校（現県立奈良高等学校）入学。在学中は切手蒐集・エスペラント等に熱中
昭 4 9	〔エラケツ、天理教校へ留学のため来日〕
5 3	奈良中学校卒業。短期間、大阪の無電学校に通う
4	天理外国語学校馬来語部入学（同期は10名ほど）。馬来語教師佐藤栄三郎らに基礎を学ぶ
10/ 1	自転車で世界一周するエスペ란チストのルシアン・ベレル（フランス）が来寧、自宅に一泊させる。翌2日、奈良エスペラント会の田村復之助と共に奈良中学・天理外語、春日神社・東大寺を案内
10/25	天理外語の外国語劇（於天理教館）に出演した際、初めてエラケツに会う
10	奈良エスペラント会（創設は前年カ）の機関誌『EL NARA』を創刊。編集を担当
6 3/28	エラケツと共に奈良県立図書館読書会例会にて講話。聴講者六十余名
夏	大阪外国語学校のドイツ語夏期講習会へ通う
10	『パラオ叢書 パラオ語概略／パラオ語テキスト（第1篇）』（エラケツと共編）を作成。昭和7年2月までにパラオ叢書計6冊を作る
7 2	『南洋パラオ島の伝説と民謡』（東洋民俗博物館）刊行。同月14日、奈良ホテルにて出版記念会開催
3/26	エスペランチストのカール・マイエル（ドイツ）が大阪エス会員一行と共に来寧、大和日報社・北村写真館へ案内し、猿沢池畔で記念撮影
6/ 4	エスペラント学習のため奈良女高師の学生長谷川テル・長戸恭らが宮武宅へ来訪。長谷川・長戸は同年9月労働・農民運動に関与した廉で逮捕される
6/ 9	エスペランチストのヨゼフ・マヨール（ハンガリー）が来寧、奈良公園を案内し、自宅に一泊させる。翌10日、マヨールが奈良中学講堂にて行った、「日本とハンガリー」と題する講演（エスペラント）を通訳
7/21	奈良市嘱託（産業調査委託）・東洋民俗博物館嘱託として、ジャワ・セレベス島へ向け神戸港より出発（～8/29）。ジャワではエスペランチストとも交流
7	『奈良茶粥』（山本書店）刊行
11	『爪哇見聞記』を自費出版。同月肋膜炎を患う
12	天理外語馬来語部を3年2学期修了時に病氣中退
8 11	エラケツから聞き取った話を翻訳し、『宮武正道報告第1輯 ミクロネシア群島パラオの土俗と島語テキスト』を自費で刊行
12/12・13	ビンタン・ティムール紙主幹バラダ・ハラハップを迎え、市中を案内。ハラハップの希望に従い、マレー語による日本語文法書の執筆を開始
10 5	『宮武正道報告第2輯 馬来語書キ日本語文法ノ輪廊』を自費出版
11 2/ 3	奈良県高市郡鴨公村の吉井タツエと結婚
3	『マレー語現代文方言ノ研究』（大阪外語馬来語部南洋研究会）刊行
7	『続篇 マレー語現代文方言ノ研究』（大阪外語南洋研究会）刊行。エラケツのパラオ帰島と北村信昭のパラオ島訪問の合同歓送会に出席
12 3/14	長男テラス誕生
8/ 1～18	大阪外語マレー語講習会の講師を務める
11/25	同日付で機関誌『カナノヒカリ』の昭和13年度編集委員に推薦される
13 6	『日馬小辞典』（岡崎屋書店）を刊行
10	『マレー語新語辞典』（大阪外語馬来語部南洋研究会）刊行
	K・Wirjosaksono より資料提供を受け、『ジャバ語文法概略』を編纂

年 月 日	事 項
14	4/29 第27回日本エスペラント大会に参加
	4 『エスペラントゴ ガキ ニッポンゴ プンボー』(岡崎屋書店)を刊行
	5 『南洋文学』(弘文堂書房)を刊行
	11 日本エスペラント学会より「高等エスペラント学力認定証」を授与される
16	1 松岡洋右外相の協力依頼に従い、『標準馬來語大辞典』の編纂に着手
	6 『最新ポケット マレー語案内』(大阪商業報国聯盟)刊行。翌年3月、大和出版社より増補版刊行
	12/20 奈良県立奈良図書館の第160回読書会にて「南洋の文化と民俗」と題し講演(於奈良図書館事務室)
17	3/ 3~ 12週間にわたり「マレー語講習会」(奈良県拓殖協会主催、奈良県後援)の講師を務める
	3 『コンサイス馬來語新辞典』(愛国新聞社出版部。興亜協会編、宇治武夫とラデン・スジョノ校閲)を刊行
	4 『大東亜語学叢刊 マレー語』(朝日新聞社)を刊行
	6 『ヤシノミズノアジ』(カナモジカイ)を改訂刊行(昭和11年旧版発行)
	11 『標準マレー語講座』I(岡田顕家と共著、横浜商工会議所)を刊行。18年3月までに全3冊を刊行
18	2 『高等マライ語研究—方言と新聞—』(岡崎屋出版)を刊行
	『パラオ島童話集 お月さまに昇った話』(北村信昭と共著、国華堂日童社)
	4 『南洋の言語と文学』(湯川弘文社)を刊行
	6 『マライ語童話集 カド爺さんの話』(土家由岐雄と共著、増進堂)刊行
	7 編纂を終了した『標準馬來語大辞典』(岡田顕家と共に編纂主任をつとめる、博文館)が刊行される
	9 『マライ語童話集』(愛国新聞社出版部)を刊行
	11/25 スカルノの来寧に際し通訳を務め、歓迎晩餐会(於奈良ホテル)では知事の挨拶を通訳
19	1 『インドネシア・ブルー』(左山貞雄と共編、湯川弘文社)を刊行
	3 (エラケツ、パラオで潜水事故により死去)
	7/ 3 奈良県よりマレー語担当の通訳事務を嘱託される
	8/16 自宅にて病死

◇宮武タツエ編『宮武正道 追想』(同、1993年)の年譜を基本とし、著作の刊行年月は現物で確認した。宮武の著作以外では、家永三郎責任編集『日本平和論大系』17(日本図書センター、1994年)、北村信昭『エラケツ君の思い出』(ミクロネシア民俗会、1954年)と宮武家資料のパンフレット類を参照。邦文以外による著作タイトルは略し、関連事項は〔 〕で括った

録」を見ると、宮武の興味はそれに止まらなかったようである。同書は、文字通り近代「大和の蒐癖人物志」(はしがき)だが、宮武もコレクターの一人として掲載されており、「蒐集物の名」の項には「古銭、古墨、絵葉書、切手、切符、語学に関する書籍」、「蒐集の範囲」には「古今東西にわたり、すこぶる洽汎なり」、「蒐集品の珍品」には「皇朝銭十二文、至元通宝」とある。<sup>④</sup>少年時代に芽生えた「モノ」を集めることへの熱意——やがてそれは無形の「知」へと及ぶこととなる。エスペラントである。

何故この時宮武の知的好奇心の対象が文学や芸術などではなく、ザメンホフが一八八七年に『国際語——序文と全教程——』により提示した人工語であったのか、その理由は定かではない。

ただ、大正八年に日本エスペラント学会が創立され、学校や地域を基盤とするエスペラント普及運動が当時上昇期にあったことは間違いない。宮武の中学校の友人は、「エスペラント語をやってみないか」と、一度か二度君よりすすめられた事があり、世界共通語である等と、詳しい説明を受けました「彼はエスペラント語の勉強に熱中していて、私もすすめられた事が何回かあった」と証言している。しかし彼らは興味を示さず、「一年位で大体エスペラントをマスターした」という宮武であったが、中学時代は同好の士を得るのに苦労したようである。そうした雌伏の時を経、昭和五年三月に宮武は奈良中学を卒業、ラジオの組み立てへの興味から大阪の無電学校へ通うが間もなく辞め、同年四月天理外国語学校馬来語部（本科）に入学する。

天理外国語学校（以下「外国語学校」を「外語」と略）は、大正一四年二月、海外布教のための人材養成を目的として創設され、支那・蒙古・馬來・印度・西（スペイン）・英・露・仏・独・伊・朝鮮の一一語部が置かれた。該語部への入学により、宮武はマレー語の基礎を築くことになるのだが、それについてはここでは措く。さて、天理外語で本格的に言語（学）を学ぶ中で、宮武のエスペラントへの熱意は黙し難いものとなったようで、奈良外科病院副院長加藤宣道、観世流謡曲師範を父にもつ田村復之助らと先年創設していた奈良エスペラント会（以下奈良エス会と略）の活動に、本腰を入れ始める。後に宮武と共著をものすことになる新聞記者・写真家の北村信昭は、丁度その頃友人と『プロレタリア・エスペラント講座』（鉄塔書院、昭和五く六年）をテキストにエスペラントを学び始めたが、その回顧によると、奈良エス会の会員勧誘はかなり大胆に行われたようである。

その頃（註―昭和五年）、奈良図書館の閲覧室で、石黒修氏のエス語の初歩的な独習書などをかりて、一人で学習していると、ある日の帰途、図書館の玄関口まで追うようにして、つけて来た一人の青年に呼びとめられた。エスペラントを学習しておられるようだが、西御門（註―奈良市西御門町）の宮武方に「奈良エスペラント会」を置き、週一、二回、日をきめて夜七時から学習しているかと、参加を求められた。大阪から奈良へ来ていた田村復之助君という青年であった。<sup>⑪</sup>

このようにして会員を増やしつつ、宮武の主宰により学習会を開いていた奈良エス会は、昭和五年一〇月に謄写版雑誌『EL NARA』を創刊する。同誌は「奈良エスペラント語<sup>(マヤ)</sup>研究会の機関雑誌として又一般言語の研究発表機関として」(「一」)<sup>⑫</sup>刊行され、会則第四條に「ロハニテ本会ニ於テ適当トミトムル者ニ限り配布ス」(「四—二」)と決められていた。<sup>⑬</sup>印刷は、その後宮武の著作を多く担当することになる同胞社——同じ馬來語部に在籍していた吉川清太郎が代表を務める——が請け負っている。謄写版とは言え、無料で機関誌を配ると言うのであるから、会員に「適当トミトムル者」を加えても、さほど大所帯ではなかったことは、容易に想像出来るであろう。宮武の手になると思われる第五号(昭和六年九月)の「民話応用 奈良県エスペランチスト悪評記」によると、宮武以外の会員は前出の加藤・田村・北村に加え、電灯会社勤務の鈴木克英、元小学校教員の早味ひさ子、奈良中学教員森三郎、パラオから天理 교校への留学生エラケツ、郡山中学教員笹谷良造らという顔触れであった。このうち全八号の主な寄稿者は、宮武(全号)、森(一、三、六)、田村(一、四)、北村(二、三、五、八)の四名で、第八号以外は宮武が編集したが、時には自ら鉄筆を揮い、一〇〇円もの懸賞をかけたエスペラントのクイズを出すなどして、手作りの雑誌を通じて奈良エス会を盛り立てて行こうとしたのである。

主たる書き手四人のうち、田村は「貿易と国際語」(「二」)において、日本で学習機関が充実していない商業英語を国際貿易で使用するよりも、見本市などヨーロッパ商業界で実用化されているエスペラントを使うべきとして、商業学校でのエスペラント教授も提唱し、第三・四号ではラテン・英・仏・西語とエスペラントとの語彙比較をするなど、会員中「エス語が一番よく出来た」(「五—四」)ため、初期の同会を牽引した。宮武の母校奈良中学の英語教師である森は、「世の言語学者の等しく推賞して止まない名著」(「三—三」)であるアメリカの言語学者ブルームフィールド J. Bloomfield の *An introduction to the study of language* (London 1914) を抄訳し、連載している。この二人に対し、会運営の中心であった宮武・北村の著作には前掲「民話応用 奈良県エスペランチスト悪評記」のような戯文も含まれるが、それらを除いてエスペラントに関する論のみを見てみよう。まず北村は「エスペラントとその歴史的役割」(「二」)において、「言

「靈」的言語崇拜觀念を否定し、「言語はそれを使駆し、実用する人間によつて生かされる」(三頁)という考えから、世のあらゆる既成の国語。全人類を包む多くの自然發生語。長い年代を経て、様々に染り、歪み、或は覆はれてゐた言語。それらの言語を徹底的に科学的批判・解剖を計る、他のよ<sup>レ</sup>これざる(支配されざる)言葉は無いか。有る!! エスペラントだ(二二三―四)。<sup>⑬</sup>と高らかに宣言する。また「エスペラントの浮游性」(三)では、日本のエスペラント界の勢力図を希望社、プロレタリア・エスペラント(以下プロ・エスと略)講座、日本エスペラント学会の三巴と分析し、エスペランチストは「エスペラントの精神を現時の發展しつゝある社会的状態を通して適確に認識し、阿片的溺愛者流への、よき近視眼鏡的役割の<sup>(主役)</sup>遂行者であらねばならない」(三―四頁)として、現実社会に根を下ろしたエスペラントのあり方を提唱した。

## 第二節 社交か思想運動か

こうした北村のプロ・エス運動に共鳴するような姿勢——用語も「科学的批判」「階級」などを鏤める——に対し、宮武は「エス雑誌でなかなかエス語の事おかかないので珍らしい」「エルナラ」お、インチキ雑誌の一種みたいに思つてゐる奴がいるが、本誌はNoma Esperantoの最高權威で、決してインチキでわなご」(五一―)と、Noma Esperantisto = 「単にエスペランチストと称してエスペラントグループを社交機関とする部類」(同上)を以て自認し、次の第六号(昭和六年二月)では「ロンピスト(破壊主義者)の宣言」(二頁)と題して怪気炎をあげている。

近時インテリと称する不徹底なるイデオロギーに浸りて浅薄なる理論お知れるも、実行能力と特殊技能お有せざる失業的存在いちぢるしく増加せり。現今世には、<sup>レ</sup>かる講談社会主義者・机マルキスト先生等皆此の部類にして、エスペラント語お以て世界平和お確立せんとする人道主義者また然り。そもそも自己の手に負えざる事に手お出すわ之れ馬鹿の初めなり。実行し得ざる寢言のかけらお喋々囁々大語する者わ、世お乱し人お惑すの甚しきものなれば、すべからく自から死お選びて失業者お救済せば、これこそ誠の人道主義と言ふべし。(後略)



このように切って捨てる彼が、プロ・エス運動に共感する筈もなく、北村の「エスペラントは、その拡大運動それ自身が国際的平和運動であると同時に単に各国人が、その非科学的な自国語を、それによつて再批判することのみをもつてしても、絶大な意義を有する」(前出「エスペラントとその歴史的役割」四頁)といった主張などは、全く肯んぜられないものであつたろう。宮武のエスペラント観は、「エスペラントは言語である。単なる言語なのである。従つてそれが言語である以上ファツシズムの宣伝にも、商店の広告にも使用されるだらうが、エスペラント語其のものは本質的には如何なる思想をも含んでいないのである」<sup>⑧</sup>という言葉に集約されており、初学者に「今直ちにエス語を実用性のあるものと思つておやりになるのであつたならばお止めなさい。若しそうでなく、たゞ趣味性の満足を目的としておやりになるならば、喜んで教へてあげませう」(「エス語に於ける通有性」【六一—二】)と諭す会員鈴木克英の姿勢に、むしろ理解を示している。従つて、エスペラントの実用性についても、「芸術に、宗教に、大衆の間に根を置く」(前出北村「エスペラントの浮游性」四頁)ことにより得られるとは考えておらず、「もし我々が外国に旅行せんとする時、先づエスペラントを話す人々の名前の書いてある名簿をくる、そして自分のこれから行こうとする地方の会員に一本の手紙を出してさえおけば、もうそれで我々は迷子になる心配がない」<sup>⑨</sup>という趣味人同志が「点」で繋がること、そういうことこそを実用性と捉えているのである。

このように、奈良エス会を社交機関と見て運営する宮武の元には、昭和五年一〇月に自転車世界一周の途上で立ち寄つたルシアン・ペレール Lucien Péraire (フランス) を皮切りに、昭和七年二月にカール・マイエル Karl Maier (ドイツ)、同年六月にはヨゼフ・マヨール Josef Major (ハンガリー) らが訪れ、諸外国のエスペランティストとは交流がもたれた。しかし、宮武の「奈良エス会近況」(【八】)によると、会員自体の学習会等への参加状況は、だんだん悪くなつていたようである。会の発起人であつた加藤宣道は会場の宮武家の近所にいるが減多に出てこず、会社員鈴木克英は退会して登山に専念。熱心だつたもう一人の発起人田村復之助は大阪に帰つて謡曲師になり、家庭教師で忙しい奈良中学教員森三郎は五

月からまだ一回も出席していない。「北村君だけは暇だから大抵欠かさず出て来る」(九頁)が、印刷屋の吉川清太郎は時々しか来ないし、郡山中学教員の笹谷良造は、尼辻から郡山に引つ越した後一向に出て来なくなってしまった、という。それら従来会員の不振を埋めるべく、天理外語のある山辺郡丹波市町から五人、奈良女子高等師範学校(現奈良女子大学。以下奈良女高師と略)の生徒ら五人の *gesamidea* <sup>同志</sup> が加わったが、その生徒の中に、後に中国国民党中央宣伝部で抗日放送に従事し、「嬌声売国奴」(『都新聞』昭和十三年一月一日付)と呼ばれる長谷川テルがいた。

明治四十五年三月、土木技師の次女として山梨県に誕生した長谷川は、東京府立第三高等女学校(現都立駒場高校)を経て、昭和四年奈良女高師へ入学する。旅行や奈良の古寺歴訪を楽しんでいた長谷川が、同級生長戸恭と共に、新劇・文学・エスペラントの愛好者を集めた文化サークルを学内に作ったのは、昭和七年六月ごろのことであった。<sup>⑨</sup> 同月、彼女たち五人は宮武の元を訪れる。

去る六月四日より女高師生がエス語の講習を僕の所にもちかけて来た。大阪外語の浅井(註―恵倫)先生と相談の上、女の子は偉らそうなことを言っているが何も知らないから余りむづかしい本を使わない方が良いだらう。と言うので井上さんの初等エスペラント読本を使用する事にした。実際やつて見ると恐ろしく熱心で前言を取消さねばならなくなつた(前出「奈良エス会近況」九頁)。<sup>⑩</sup>

このような若く熱心な学生を得て、奈良のエスペラント界が活況を呈して行くかと思われた矢先の同年九月、長谷川と長戸は当局に逮捕される。奈良合同労働組合や全国農民組合全国会議奈良県評議会といった労働・農民運動団体と接触した廉で、八月三十一日の県内活動家大検挙の煽りを食ったのである。<sup>⑪</sup> 二人は一〇―二〇日ほどで釈放されたが、女高師は退学処分となり、奈良エス会は若い力を失つてしまう。こうしたプロレタリア文化運動の弾圧を契機とするエスペラント白眼視の状況に加え、同年十一月自身が肋膜炎に罹患したことは、奈良エス会の活動を失速させるに充分であった。昭和四年四月に『エスペラントゴガキニッポンゴブンボー』(*Japania Granatiko por Esperantisto*) (岡崎屋書店)を刊行し、第二七回日本エスペラント大会に参加、同年十一月には日本エスペラント学会より「高等学力認定証」を授与されるなど、

その後も宮武自身はエスペ란ティストの学習・研究を続けるが、研究会が活気を取り戻すことはなかった。

- ① 北村信昭『エラケツ君の思い出』ミクロネシア民俗会、一九五四年、一〇頁。
- ② この御前能については、宮武鶴齋『薪御能記』(同、昭和十三年、天理大学附属天理図書館所蔵)を参照。
- ③ 宮武タツエ編、前掲書、一六―一七頁。
- ④ 乾健治編『大和蒐集家人名録』山本書店、昭和七年、五三頁。
- ⑤ 大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』三省堂、一九七四年、一五八頁。
- ⑥ 宮武タツエ編、前掲書、五八・六一頁。
- ⑦ 同上、四〇頁。
- ⑧ 宮武正道『奈良茶粥』山本書店、昭和七年七月、三〇頁。
- ⑨ 天理大学五十年誌編纂委員会編『天理大学五十年誌』同大学、一九七五年、五九―六六頁。
- ⑩ 北村の略歴については、浅田隆『奈良大学図書館「北村信昭文庫」II 北園克衛初期詩篇補遺ならびに北村宛諸氏書簡』(総合研究所所報(奈良大学総合研究所)第一五号、二〇〇七年三月)を参照。
- ⑪ 宮武タツエ編、前掲書、三九―四〇頁。
- ⑫ 『EL NARA』第一号、昭和五年一〇月、一頁。以下本稿で出典が『EL NARA』(宮武家資料)の場合、『号(一頁)』の如く示す。各号の刊行年月は以下の通り。第一号―昭和五年一〇月、二号―同五年十二月、三号―同六年四月、四号―同六年六月、五号―同六年九月、六号―同六年十二月、七号―同七年三月、八号―同七年七月。
- ⑬ 「適当トミットムル者」には、エスペラントで「GLEICHENIA —unu el la kauloj de mia ESPERANTISTIGO—」(「ヤ」を寄稿した日本エスペラント学会大阪支部の川崎直一、「解り易いノートの整理の積り」(四―二二)で独習しているアラビア語の文典について書いた天理外語の馬來語教師佐藤栄三郎、といった人たちが該当すると思われる。
- ⑭ 長谷川テルらの検挙事件(後述)の後、昭和九年頃『EL NARA』は宮武の個人誌として復活するようだ(『LA REVUO ORIENTAJ』第一五年第九号、昭和九年九月、二七〇頁)が、本稿では奈良エス会の機関誌としての時期のみを対象とする。
- ⑮ エスペラントとパラオ語に最も熱意を注いでいた頃の文章では、宮武はこのような発音式仮名遣い(後述)を用いていることが多い。
- ⑯ 社会教育家後藤静香が大正七年に設立した労資協調を説く修養団体で、昭和五年にエスペラントを導入し、雑誌『Esperanto Kikooŝi』を刊行した(田中貞美・峰芳隆・宮本正男共編『日本エスペラント運動人名小事典』日本エスペラント図書刊行会、一九八四年、四六頁)。
- ⑰ 宮武正道『爪哇見聞記』同、昭和七年一月、二五頁。同書は「ジャワ」を全て「爪哇」と誤記しているが、ルビを一々付すことはせず、正しい表記に改めた。
- ⑱ 同上。
- ⑲ 長谷川川の生涯については、家永三郎責任編集『日本平和論大系』17(日本図書センター、一九九四年)の宮本正男「長谷川川テルの生涯とその時代——編者まえがき」と「長谷川川テル年譜」を参照。
- ⑳ エスペラント学習開始時の様子を、長谷川川に姉に手紙で知らせている(利根光一「テルの生涯」要文社、一九六九年、一〇六頁)。

人。天理外語学校の生徒でまだ青二歳、少々たよりないけど我慢しています。とてもお坊ちゃんで愉快なんです。あたし達を目の前において『女の子』を発し、女の子はエスペラントも初歩しかやれやしないだろうとか言いうから、発奮して大いに勉強

してやろうと思うんですけど、やっぱり少し面倒くさくって……でも大いにやるつもりです。  
② 大山峻峰「長戸恭と長谷川テル」前掲『日本平和論大系』17、二一—二二五頁。

## 第二章 パラオ語

### 第一節 エラケツとの出会い

「奈良中学在学当時からエキゾティクな事物に対して非常な憧れを抱いていた」と告白する宮武は、自らがのめり込んだ「エキゾティク」な趣味を切手蒐集、絵葉書コレクション、エスペラント研究と順に記しているが、天理外語に入学してから始まった「語学道楽」の筆頭として、「パラオ語の研究」を挙げている。<sup>①</sup>このパラオ語への熱意は、当時創刊したばかりの『EL NARA』にも飛び火し、前章では触れなかったが、第二―四号での「パラオゴケンキュー」（パラオ語の語彙・発音・文法等の概説。第二号のみ「パラウ」と表記）の連載という形で結実している。またパラオの民話や神話等を、日本エスペラント学会の機関誌『LA REVUO ORIENTA』や天理外語学芸部の『心光』という雑誌に寄せるなど、奈良エス会を主宰しながら、パラオ語やパラオの文化への興味を強めていった。最終的には、こうした天理外語以降の「語学道楽」がエスペラントを圧倒したことも、奈良エス会が開店休業状態となった大きな原因の一つと思われるが、その発端となるパラオ語へ触れる契機となったのは、前述したパラオからの留学生エラケツとの出会いであった。

昭和四年九月の大阪毎日新聞奈良版で来寧を知り、天理外語へ通う途上で屢々見掛けた、パラオ・コロールの首長を父にもつエラケツ Ngiraked と、宮武が初めて言葉を交わしたのは、同五年一〇月のことであった。

昭和五年十月二十五日の夜外語生の外国語劇が天理教館で催され、其の時私が楽屋で<sup>扮</sup>装してゐる所へ同君がヒョッコリやつて来た

ので早速彼をつかまえ松岡静雄氏の『パラウ語の研究』<sup>④</sup>で覚えた唯一のパラオ語『ガツ』と言うのを持ち出し、『パラオ語で人の事をガツ (Kadé) と言うか』と尋ねた。すると同君は『違う、人の事をハドと言うんだ』と答えたのが二人の知り合になつた最初で、其の翌日の夕方私はエラケツ君を自分の家に連れて来て夕食を共にしながら色々南洋の話やパラオ語を聞かせて貰つた。<sup>⑤</sup>

パラオを含むドイツ領ミクロネシアは大正三年、第一次世界大戦に参戦した日本に占領され、約八年の軍政を経た同一年、国際連盟からの委任統治地域として正式に日本領土となつた。ミクロネシアへは、海軍による占領の後、風土文物・風俗習慣や人種・言語などを調査すべく医学者・人類学者・民族学者らが赴き、文部省専門学務局編『南洋新占領地視察報告』(同、大正五年)や松岡静雄『ミクロネシア民族誌』(岡書院、昭和二年)といった成果が得られたが、「海のない古都奈良に生をうけた二人の青年」である宮武と北村も、エラケツとの出会いにより「激しく南の海洋を憧憬する」こととなり、パラオの研究へと惹かれていった。<sup>⑥</sup>

北村より一足先にエラケツと知り合つた宮武は、毎日天理小学校で漢字の勉強をしている彼を訪ねてパラオの伝説・民話・民謡を聞き取り、その断片を前述の如く『LA REVUE ORIENTA』などに発表したほか、語彙・会話文をも多く収めた『パラオ叢書』(昭和六年一〇月〜七年二月)をエラケツと共に編集し、自ら謄写版で発行した。そして昭和七年二月、それら約一年間の聞き取り資料を纏め、全て和訳して刊行したのが『南洋パラオ島の伝説と民謡』(東洋民俗博物館。以下『伝説と民謡』と略)である。その「はしがき」に、

エラケツ君の父君が酋長であつた關係上、君わ他の同年輩の誰よりも沢山色々な話お聞かされていた。彼わ長男でわないけれども、酋長の息子として文字に記されていない自分達の村の種々な伝説お覚えていと言う事が、将来何れかの村の酋長とならないとも限らない此の若い有力者のなさねばならないとめでもあつたのだ。そんなわけで彼わ非常に豊富に種々な話お覚えていた。

とあるが、同書の構成は、「伝説」「童話」「民謡」と「雑」、そして末尾にエスペラントによる抄訳がくる、というものであつた。「序」には、出版元である東洋民俗博物館の館長九十九豊勝より、「史実に次ぐ民族の過去の事実を物語る伝説は

各民族のもつ特殊の伝承であつて、此の伝説から多くの貴重なる土俗学的・人種学的・考古学的の発見を我々に持ち来らすものである」と期待が寄せられている。

## 第二節 「土俗趣味家」への「墮落」

『伝説と民謡』の「伝説」には、母に焼き殺されて海に倒れた巨人の骸がバラオ島となつた、という「バラオ島の起源」や、宮武が「勿論此の話わあてにならないが一寸面白い」（三二頁）とする、漂流したバラオ人が日本人の祖先となつた話（日本人の祖先）など——後者は日本統治下に入つて以後脚色されたものであろう——があるが、やはり山・木や鳥といった自然や動物にまつわるもの、人間臭い神々が躍動する話が主である。「童話」には、日本と違つて蟹がずる賢い「猿と蟹の話」、最後は共に富を得る「二人の貧しい姉弟の話」など、お伽噺風のものが収められている。これら民話が非常に典型的であるのに対して、「民謡」「雑」には種々特徴的な点が見られる。先ず「民謡」の方では、右の「童話」とは異なり作者が判明している最近のものが目立ち、宮武はこれらを、大正以降中山晋平らにより盛んに創作された、ある特定の土地のための歌謡と同じく「新民謡」と呼んでいる。そのうちの一つ、「二人共寝の其の時に／子守が子供抱く如く／私のからだにからまつた」という艶めかしい詞を持つ、「アマツトルの謡」の註釈を見てみよう。

此の謡の作者わ×××と言う男で、かつて東京の電機学校に入学せんとして来朝したが、学力不足で不許可となり、其の上日本で或る女郎に入れあげ、文無しになつて國に帰れず困つていた時、折良く日本に観光に来た親類の者に金お貰つてバラオに逃げ帰り、國に帰ると前の失敗にめげず早速日本名おシズコと言う美人でわあるが浮氣で有名だつたバラオ娘にひつかり、その時の事お自ら歌つたもので、南洋でわ有名な新民謡である（六三頁）。

このほか、同じく男女の情交を歌つた「ともねの謡」、契りを交わしたドイツの学者を恋う「私の恋の耳飾お捧げた我等のドクトルの帰国お歌える謡」も明確に近代のものであるが、「雑」にも現代民謡と言つてよい話がいくつか含まれて

いる。例えば「阿呆につける薬」は、エラケツの叔父が独領時代、兵隊として赴いたマレーで製法を学んだという薬を、「コロール公学校の同級生で、学校お落第しかけていた奴に飲ませたら一辺に級長に昇進した」(九九頁)というファンタジーである。「雑」のそれ以外は、「シヤマンの話」や「禁忌の話」のように信仰・習慣などの紹介が主であるが、その中にも性風俗にまつわる「女の体から水お出した男の話」「アル・メゴルの話」がある。前者は、宮武が「南洋のドン・ファン」(九六頁)と呼ぶ元燐鉱会社の人夫頭が駆使する、「女の体から水お出す」(九五頁)不思議な術を、ドイツの研究者が調査にやって来た話で、後者は、戦争に負けた村の若い女性が、バイという集会所に連行されてアル・メゴルと呼ばれ、様々な業務に従事するという制度を取り上げている。このアル・メゴルについて宮武は、「其の女と性交する事わ許されなく、唯踊其の他の相手として遊ぶだけだから女中兼芸者、ダンサー・女給の如きもの」(八二頁)というエラケツの説を引き、「男と遊んで関係したいと言(な)う事わ一寸信用出来ないし又、性的享樂が唯一の娛樂である島民にわ、一寸聞えない話でわないか?」(八三頁)と疑義を呈しながらも、前出の松岡静雄『パラウ語の研究』の如く、様々な仕事をこなす彼女たちを「娼婦と訳することわ一寸気の毒」(八二頁)としている<sup>⑨</sup>。

このように、同書が新旧の性民俗を積極的に取り上げたものとなった要因としては、発行者九十九豊勝の影響が考えられる。九十九は昭和三年菖蒲池畔に開いた東洋民俗博物館に、「土俗学資料」、殊に「エロ的資料一切」を蒐集した人物で、蒐集家三田平凡寺が作った奇人連合「我樂他宗」<sup>⑩</sup>に倣ったような「日本我樂他宗奈良別院」を主宰して、県内好事家の一つの中心となっていたが、宮武は同別院の「第四番札所 性洞山食人寺」を称し<sup>⑪</sup>、九十九宅などで開かれる日本土俗学会にも参加する程であった。こうした交流が、『伝説と民謡』における性民俗資料の採取へと繋がったと思われる。『伝説と民謡』は、刊行から二年弱後の昭和八年一月、エラケツから聞き取った話のパラオ語テキストやパラオ語彙、簡単な会話例文を増補し、『宮武正道報告第一輯 ミクロネシヤ群島パラオの土俗と島語テキスト』(以下『報告第一輯』と略)と題して自費出版された。『報告第一輯』中、上篇の「神話・伝説・童話の部」「民謡の部」「雑の部」は、一部追加と削除

(話自体がなくなっていたり註釈が簡素になっている) があるものの、『伝説と民謡』の内容をほぼ踏襲しており、下篇「パラオ語テキストの部」こそが、「将に亡びんとする南洋群島の土語を出来るだけ機会を捉えて之を採集し将来に残すと同時に之を言語学的に研究して見よう」(四頁) という「はしがき」の趣旨に合致する部分と言えるであろう。

しかし、松岡静雄『パラウ語の研究』や Salvator Walleser, *Palau Wörterbuch* (Hongkong, 1913) を参照して、ノートにエラケツの話を書きためているうち、宮武の心境に変化が生じてきたことも、同じ「はしがき」は示している。

最初はパラオの言語を研究するつもりでいたものが何時の間にやら話の方に興味をひかれ出し、一々パラオ語で話して貰つて之を書き取り更に訳するのが面倒で、公学校の主席で卒業後法院の通訳をやつていた同君の流暢な日本語で南洋の神話伝説を聞かせて貰つて之を書き取る方が面白くなり、最初の目的であつた言語研究が姿を隠し、最悪な方法を取る土俗趣味家に墮落してしまつた(『報告第一輯』二―三頁)。

このように、パラオでは「性的享樂が唯一の娛樂」(前掲『伝説と民謡』八三頁) といったオリエンタリズムによる表象は多少あるものの、当初はパラオ語という言語のみに向いていた宮武の視線は、その奥にあるパラオの土俗へも向かうようになつていた。つまり、彼のエキゾティズムの対象が、人工の国際語エスベラントから、同じ「言語」である土着の民族語・パラオ語のみならず、一度はパラオの土俗という民族文化へと広がつたのである。ただそれと同時に、「私は地方の謂所郷土研究家の様に無智な民衆から資料を搾取しておき乍ら自分が一廉の研究家でもある様に自己陶醉に陥つて居ようと言うのではない」(『報告第一輯』四頁) と言うように、これ以上土俗研究の深みにはまらぬよう強く自戒していたことは、注意しておかねばならない。

① 宮武正道、前掲『爪哇見聞記』、自序。

② 前者の第一二年第七―九号(昭和六年七―九月)に「Popol-Rakontoj kaj Popol-kantoj de Palau-Insulo (パラウ島の口碑と民謡)」

を載せ、後者(天理大学附属天理図書館所蔵)の第三号「南洋漫談」(昭和七年三月)で「蟹と鼠の話」を紹介している。  
③ 本稿では当時の呼称に従つたが、「一寸日本人に言いくいので通



称として此の *Nebraskan* お少し転化せしめて、エラケツと称する様になつた(『南洋パラオ島の伝説と民謡』東洋民俗博物館、昭和七年二月、はしがき)と宮武が書いてるように、本来「エラケツ」とはパラオ語の読みの正確な反映を期した表記ではない。

④ 柳田国男の実弟であり、かつて海軍軍人であつた民族学・言語学者松岡静雄は、一九二〇―三〇年代にかけて、ミクロネシア関係書、特に「チャモロ語の研究」(郷土研究社、一九二六年)・「パラウ語の研究」(同、一九三〇年)・「ヤップ語の研究」(同、一九三二年)など、該地の言語についての著作を多く発表した(坂野徹『帝国日本と人類学者 一八八四―一九五二年』勁草書房、二〇〇五年、三六六―三六七頁)。

⑤ *Nebraskan* 氏述・宮武正道訳編『宮武正道報告第一輯 ミクロネシア群島パラオの土俗と島語テキスト』宮武正道、昭和八年一月、一二頁。

⑥ 人類学を中心とした、ミクロネシアの学術的調査・研究の流れについては、坂野徹前掲書の第六章に詳しい。

⑦ 北村信昭、前掲書、自序。

### 第三章 マレー語

#### 第一節 新聞・雑誌の「生キタマレー語」

『伝説と民謡』と『報告第一輯』の合間、昭和七年七月に宮武は、「奈良に残る土俗、名物などのあまり知られてゐないところを得意の筆で著はした」『奈良茶粥』(山本書店)を刊行し、新聞広告でも「土俗研究家」と称されるようになっていた<sup>①</sup>。しかし、共にエラケツからパラオの話を取りつた北村信昭が、『南洋パラオ諸島の民俗』(東洋民俗博物館、昭和

⑧ 九十九については、拙稿「蒐集家崎山卯左衛門の郷土研究」(久留島浩・高木博志・高橋一樹編『文人世界の光と古都奈良——大和の生き字引・水木要太郎——』思文閣出版、二〇〇九年)の七一―七二頁を参照。

⑨ 松岡が同書で「メノル」を「巫娼」、「アルメノル」を「娼婦」と訳している(三五七頁)のに対し、人類学者の長谷部言人は『過去の我南洋』(岡書院、昭和七年)において「娼婦ではなく、この制度は寧ろ未婚女子の教養上必要と認められてゐた」(七三頁)としており、宮武は長谷部説をより妥当と見ている。

⑩ 昭和七年二月二〇日付の『大阪毎日新聞』奈良版でも、「巻末には南洋諸島の性に関する文字多し」と紹介されている(宮武家資料)。

⑪ 乾健治編、前掲書、三一頁。

⑫ 三田平凡寺と我楽他宗については、山口昌男『内田魯庵山脈——失われた日本人——発掘——』(晶文社、二〇〇一年)を参照。

⑬ 『THE CARAKUTAN』第七号、昭和六年九月、「入宗とニュース」(宮武家資料)。

八年二月の刊行を期に、ミクロネシアの民俗や生物へと熱中していくのに対し、宮武は「語学道楽」の宗旨を変えず、天理外語で専攻するマレー語に本格的に取り組み始める。その大きな契機となったのが、昭和七年七月から八月にかけてのジャワ・セレベス島旅行である。「言語と土俗研究」(二七頁)<sup>②</sup>に加え、奈良市と東洋民俗博物館の嘱託——前者は大和蚊帳南洋輸出の可能性の調査を委嘱——という肩書きを帯び、七月二日、宮武は森田宇三郎奈良市長・九十九豊勝東洋民俗博物館長達に見送られ、神戸港を出発した。沖大東島、ミンダナオ島(フィリピン)を通過し、セレベス島のマカッサルに入港したのは、八月一日のことである。「あやぶみながら話す馬來語が、大抵通じるのでゆかい」(七頁)になり、経済的に最大勢力である「支那人の本屋があつたので一寸のぞいて見ようと中に入つた」(九頁)ら、日本人と分かつて怒鳴りつけられた該地を離れ、翌々日の三日にはジャワ島のスラバヤに到着した。

スラバヤからは鉄道と飛行機を使って、スマラン―バタヴィア―バンドン―ジョグジャカルタ―ソロ(スラカルタ)と回り、八月一四日に再びスラバヤへと戻って、一七日にスラバヤを出港、二九日に神戸港へと帰着している。ジャワ島内では、ボロブドゥールやプランバナンといった名所を巡る他、南洋協会商品陳列所(スラバヤ)を訪れて、形状が異なるため「奈良蚊帳の輸出は目下の所では駄目」(二二頁)という評価を聞いたり、参拝すれば子供が授かるという女握り<sup>マフィカ</sup>の形が鑄付けられた大砲(バタヴィア)を調査したりと、嘱託された仕事をこなした。しかし、宮武にとってより重要なことは、現地住民との交流であろう。先ず宮武は、スマランにエスペランチストのリエム・チョン・ヒーを訪ね、夜市の案内などの便宜を受けている。

蒼白いそして細長い、支那人インテリとして充分な恰好の二十八九才位の青年が出て来て、すこぶる愛想よく未知の友を迎えてくれた。お互に国際語エスペラントを話す事が出来ると言う唯それだけの理由で。奥に通されてエスペラント語で互に語り合つた。今まで遇つた事も文通した事すらもない、一介の日本人旅行者を、日支間の紛争等を全く度外視して、十年の知己の如くにもてなし、何のわだかまりもなく語り合う事の出来るのは全く国際語エスペラントのゆえなのだ(二四―二五頁)。

「全く度外視」したか否かの真偽はさて置き、宮武はバタヴィアでもエスペランティストと交流したが、現地のオランダ語新聞の報道によれば、「当蘭領東印度に於けるエスペラント界の不振はいたく氏を失望せしめていたもの、如くであつた」(五二頁)という。

もう一つは、バタヴィアの新聞社経営者たち、殊に『ビンタン・ティムール Bintang Timur』主幹パラダ・ハラハップ Parada Harahap との出会いである。八月一〇日に社を訪れた宮武に対応したハラハップは、「非常な親日家で、僕が馬來語で話しかけるとすっかり驚ろき、且つ喜んで、社内を見て呉れと言つて工場を見せてくれた」(三四頁)。後にインドネシアから日本への留学生派遣を積極的に後押しすることになるハラハップは、この時の「来年日本へ行く積り」との言の通り、翌昭和八年一月、商業視察団一行を率いて来日、東京で訪日を支援した南進論者の石原廣一郎(石原産業海運合資会社)らと接触した後、二月一二・一三日に奈良の宮武を訪ねている。宮武家で謡曲・仕舞による歓迎を受けたハラハップは、宮武が南洋見聞談をマレー語で『ビンタン・ティムール』に寄稿する約束をバタヴィアで取り付けていたが、ここ奈良でも別の件、「マレー語書き日本文法」<sup>⑤</sup>書の刊行を依頼している。それに応えて執筆・自費出版されたのが、『宮武正道報告第二輯 馬來語書き日本文法ノ輪廓 *Timee Bahasa Nippon jang Ringkas*』(昭和一〇年五月)である。「本書は売る為に作つたものではありませんから、南洋人で真面目なる日本語の研究者には部数の許す限り進呈したい」(「出版の挨拶」とする同書は、日本式ローマ字の発音と日本語の品詞を解説する四〇頁ほどの小冊子であつたが、これを皮切りに宮武のマレー語研究の成果は、続々と発表されていく。

最初に世に送られたのは、語彙に関わるものであつた。この頃結婚した妻のタツエが、「語学(主に東南アジア)の勉強……と言っても彼のは現地の新聞を購入して独学で辞書を頼りに勉強するのです」<sup>⑦</sup>と回顧しているように、宮武が最も重視したのは現代のマレー語、中でも新聞・雑誌に用いられているマレー語であつた。『マレー語現代文ト方言ノ研究』は、昭和十一年三月、大阪外国語学校馬來語部南洋研究会から雑誌『凶南』第九号付録として刊行されたが、その謄写版冊子

で宮武は、

マレー語ノ文法ワ一見シタ所実ニ簡易デアル。簡易ト云ウ点カラ云エバ『エスペラント語』ノ文法ヨリモ更ニ簡単デアロウ。ケレドモマレー語ガ依然トシテ難解デアルコトワ誰レヨリモ諸君自身ガ充分御承知ノ事デアロウ。何ト言ウテモ三年間学シデモ新聞ノ三面記事一ツロク様読メナイト云ウ事実ガ証明シテイルノダカラ致シ方ガナイ。シカラバ文法ガ簡単デアルニモカカワラズ難解デアル理由ヲ如何？『純粹ノマレー語法ニ從ワズ、各人マチマチノ語法トソレゾレ勝手ナ單語ヲ採用スル』カラデアル（「前書キ」）。

として、華僑・オランダ人・ジャワ人などが自らの母語の語法・語彙を持ち込み、恰も「ゴモクズシ」の観を呈するインドネシア<sup>⑧</sup>のマレー語を腑分けして、「接続詞が増えた」等の現代マレー語文の特徴を明らかにし、「支那語」「オランダ語」「バタビヤ方言」等に由来する新語彙を「小辞典」という形で紹介している。

『マレー語現代文ト方言ノ研究』は、拓殖大学・天理外語ほかより多数の注文を受けて残部がなくなるほどの好評を博したため、宮武は「更ニマレー語新聞中ニ出テ来ルオランダ語ヤ支那人マレー語トシテ用イラレル特種ナ單語及ビ主ナル略語等」を集め、「小辞典」部分を増補してまるまる一冊にした『続篇 マレー語現代文ト方言ノ研究』（昭和十一年七月）を刊行した。また昭和十三年一〇月には、それら正統二冊の辞典部分を併せて増補した『マレー語新語辞典』（同南洋研究会）までも作られたが、新聞・雑誌を読む道具に特化したものである他に、この三冊に共通するのは、『馬來—日本語字典』（南洋協会台湾支部、昭和二年）への不満である。この辞書は、陸軍将校平岡闡造と大阪外語の教員であったバチー・ビン・ワンチク Bachee bin Wanchik の手になるもので、同書から受けた恩恵に鑑み、宮武は平岡・ワンチクを「我が国マレー語界の恩人」と讃える一方、底本にした Richard James Wilkinson, *An Abridged Malay-English Dictionary* (Kuala Lumpur, 1908) が「註—マレー」半島マレー語の小辞典であるから東印の出版物に使用される單語が随分欠けてゐる<sup>⑩</sup>ため、これだけでは「小学校ノ読本スラ満足ニ読メナイ」と手厳しい。出版社社長の求めに応じて上梓した『日馬小辞典 *Kamoes Bahasa Nippon-Indonesia*』（岡崎屋書店、昭和十三年六月）も、現地の新聞雑誌から「蘭領印度デ現在使ワレツ

アル単語」、つまり「生キタマレー語」約六〇〇〇語を収集して編集したものであり、「古文や古典ニノミ使用サレル様ナ語ハ全部之ヲハブイタ」という。<sup>⑬</sup>

## 第二節 「南方の言語政策」

このように、宮武のマレー語彙収集・辞書編纂は、当初インドネシアで発行される新聞・雑誌を読むという「実用性」を念頭に行われた。そうした中で、「南進国策もやうやく具体化して来た」と序にある『続篇 マレー語現代文ト方言ノ研究』が刊行された翌月の昭和十一年八月、五相会議(首相・陸相・海相・外相・蔵相)で決定された「国策ノ基準」により、「南方海洋殊ニ外南洋(註：現在の東南アジア島嶼部)方面ニ対シ我民族的経済的發展ヲ策」すことが定められる。そして、第二次近衛内閣下の同一五年七月に決定された「世界情勢ノ推移ニ伴フ時局処理要綱」で「対南方施策ニ関シテハ情勢ノ変転ヲ利用シ好機ヲ捕捉シ之ヲ推進ニ努ム」(第一条)と謳われ、同年八月松岡洋右外相が記者会見の席上「大東亜共栄圏」の確立という外交方針を打ち出した翌年、アジア・太平洋戦争が勃発するに及んで、宮武著書の「実用性」に別の方向が加わることとなる。昭和十七年三月、前年六月大阪商業報国聯盟より刊行した『最新ポケットマレー語案内』の増補版(大和出版社刊)の序で、宮武は次のように記している。

日本万歳 (hidoe nippon)

本書は昨年(昭和十六年)六月帝国南進の声に応じ日本人南洋発展の爲め商業組合中央会大阪支部並びに大阪府商業報国聯盟(末光秀夫氏)の委嘱により書いたものであるが、大東亜戦争の勃発により改め軍用語を加へ今般大和出版社の需めにより拡く一般に普及する様発売した。常にポケットにしのばせ必要に応じ取り出して使用される様特に型を少くした。小冊子ながら幾分でも皇軍将士並びに海外発展者のお役に立てば幸である。

同書は発音・単語・文法・会話の四篇に分かれているが、前掲『日馬小辞典』末尾の会話例文にはなかった、「軍用会

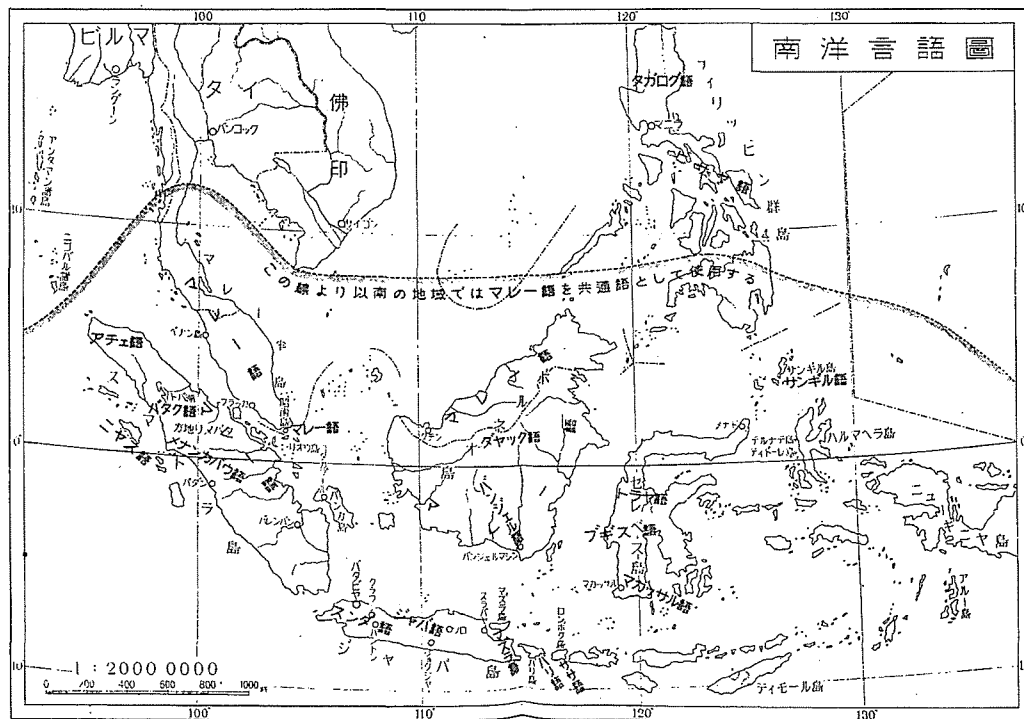
話「宣撫」という項が会話篇にはある。「どの方向に敵兵は逃げたか?」「知りません」「知つて居る者が居るか?」「いません」「居ります」「連れて来い」「承知しました」という一連の「軍用会話」や、「宣撫」の「日本軍はインドネシア人を和蘭人から解放してやる」「諸君は東洋人だ」「我々も同じ東洋人だ」「我等は共同して白人と戦かはねばならぬ」などは、同書の刊行と同じ月に日本軍により軍政が布かれたインドネシアでは、確かに「実用性」の高い例文であろう。こうした研究・著作の「実用性」が評価されたのか、昭和十五年一月に創立された「南方要員」養成機関である興亜協会は、「大東亜共栄圏建設の大方針に従ひ、南方諸国の研鑽及び南方諸民族との提携、親好に必駆なる諸事業の一つ」として刊行計画を立てた、「南方語に関する諸文献」の第一弾として、宮武の手になる『コンサイス馬來語新辞典 *Kamoes Baroe Bahasa Indonesia-Nippon*』を出版する。同書は『馬來語広文典』（岡崎屋書店、昭和十五年）・『現地活用 馬來語会話』（堂雪書院、同一七年）などの著作がある拓殖大学教授宇治武夫と、東京外語講師ラデン・スジヨノ Raden Sudjono の校閲を受けているが、この前後から宮武の名声は関東でも広がってきたようで、同じく東京外語の講師である蘭田顕家とは、「正しいマレー語を以て日常の用を弁じ進んでは日本文化の精華を彼等に伝へ得る程度にまでマレー語の学力を独修によつて与へよう」という意図の下、『標準マレー語講座』を共に著している。その蘭田と編纂主任——編纂部員にはかつての天理外語での師佐藤栄三郎の名が見える——を務め、既刊英・馬・蘭語辞典を総訳出した上に現代新語を六〇〇〇加え、「語数十萬世界最大」と謳う外務・大東亜省推薦書『標準馬來語大辞典 *Kamoes bahasa Melaye (Indonesia)~Nippon jang lengkap*』を完成させたのは、昭和十八年七月のことであった。

右のように、日本の南進政策が確立するに伴い、マレー語自身の「実用性」が一層高まったことに加え、宮武自身が積極的に南方関与した部分がある。それは言語政策である。元来宮武は、『伝説と民謡』では言語学者保科孝一の『言語学講話』（宝永館、明治三五年）を模範とする発音式仮名遣い（助詞「は・へ・を」を「わ・え・お」とし、字音仮名遣いを棒引きにする）を採用し、『EL NARA』第一号（昭和五年一〇月）の「言語学上より見たるカナ字」では、「漢字の不便は言ふ迄も

ないが、之が廃止にあつて上下の人々は讃成<sup>(ママ)</sup>を志すにひきかへて、中位の連中がえらそうに反対をするのである。なる程漢字を廃止してカナ文字にすれば一時は不便に違ひないが、なれるとずつと便利になるのである」(五頁)と漢字廃止論を唱えるなど、内向きの「国語」表記に関しては、積極的に発言してきた<sup>②</sup>。それが外向きの「日本語」、つまり宮武の場合「南方の言語政策」へと繋がるのは、『ヤシノ ミズノ アジ』(カナモジカイ、昭和一七年六月)の頃からのようである。同書は、昭和一一年にマレー半島・インドネシアの風俗習慣・伝説などを集めて刊行した同名書を、「イマ ダイト ウア キヨウエイケン ノ アタラシイ ケンセツノ トキニ、スツカリ カキアラタメテ カナノ ヨミモノトシテ」カナモジカイから出したものだが、留学生等が漢字を憶えられないことを理由に漢字廃止を訴える挿話が、全体の四分の一を占めるようになってゐる。その中の一つ「ワタクシノ シツテ イル 漢字」では、長らく神戸に在住しているが漢字を一五箇しか知らないというインドネシア人バクリーの例を採り上げ、次のように主張している(三頁)。

モハヤ ニッポンゴ ワ ニッポンジン ノミノ コトバデワ ナイ、ヒロク トウア ミンゾクノ アイダデ、アサカラ バン  
マデ トリカワサレル コトバナノ ダ、ワレワレワ ココニ オイテ、アジヤ ミンゾクノ タメニモ、ニッポンゴ ラ シナ  
ノ モジデ カキアラワサナイ ヨウニ シタイ モノデ アル

ここに至り、コウベカタカナセンターの機関誌『カタカナジダイ』に「トツクニ ノ ウワサバナシ」を連載して世界の新聞から得た情報を紹介し、第一四号(昭和一四年八月)からは同誌の編集も担当していた宮武の「日本語」表記論は、「カナモジ表記された、聞いて解る日本語を「共栄圏」内に広めよう」というカナモジカイの方針と、親和性を持ったように見える。しかし、宮武がより強く主張したのは、マレー語のローマ字表記の改革であつた。宮武は昭和一八年四月刊行の『南洋の言語と文学』(湯川弘文社。以下『言語と文学』と略)において、先ずインドネシアで使用されている一四もの言語を掲げ、その中にはジャワ語・スンダ語のような、それらを母語とする人口が多い「土着言語」もあるが、会話の容易さ、オランダ占領後の普及度、異民族間使用の利便性などから、「東印度の共通標準語としては過去に於てもマライ語



図中の言語名は土着民が母語として話してゐる言語を示す。これらの言語はみなインドネシア語族に属する。したがつて図中マレー語とあるは、それを母語として生れながら話す地域を示すのであつて、各土着民の母語以外第二の言語として南洋一帯にマレー語が用ひられてゐることを忘れてはならぬ。例えばジャバ島にはマレー語は母語としてではないが、共通語としてはもちろん通用する。スマトラ島の北東海岸、ボルネオ島海岸は全部母語としてのマレー語。スンダ語はバンドンを中心とする。その他ジャバ島一帯がジャバ語。バンジエル語はバンジエルマシンの上流地方。

図1 南洋言語図(宮武正道『大東亜語学叢刊 マレー語』朝日新聞社, 昭和17年4月。キャプションは原図のもの)



一本槍であり、将来ともこのマライ語一本槍を続行して行くのが便利」(二七―一八頁)としてマレー語の優位性を認め、「数千人の通用者しかない少数の民族語が東印度の共通標準語たるマライ語に圧倒されるのも当然のことであり、且つ喜ぶべき現象であろう」(四六頁)とまで述べている。そして次の段階として、「我々の南方の言語問題を研究する人々の緊急なる事業はこのマライ語のローマ字の統一であらねばならぬ」(二〇―二二頁)と考えた宮武は、これまでインドネシア人により考案された三つの「東印度マライ語ローマ字改良案」(英国式採用案、日本留学生式案、エジヤアン・ヌサンタラ式案)<sup>②</sup>が全て立ち消えとなっていたことを受け、「大東亜式ローマ字案」を考案する。

この宮武案は、「旧勢力の一掃のためには英式、蘭式ともに之を一掃して、真に大東亜式なるローマ字綴を採用するのが有意義」(二〇八頁)との考えに基づき、マレー語の英式(マレー半島)・蘭式(インドネシア)ローマ字を統一しようと提案されたもので、英式の j (蘭式の dj) を dy、英 ch (蘭 tj) を ty、英 sh (蘭 sj) を sy の如く日本式ローマ字と同様に改める他は、蘭式ではなく英式を準用するものである。宮武は同書に登場するマレー語をこの大東亜式で表記し、「この式に対する大方の批判をねがつてやまない」(二二頁)と反響を期待したが、さてこの方式は日本若しくはインドネシアで普及しただろうか。恐らく否である。日本においては、宮武らによりこの三ヶ月後に刊行され、語数世界最大を謳う前出の『標準馬來語大辞典』からして綴字を全て蘭式に依っているため、『言語と文学』中の僅かな単語さえ引くことが出来ず、インドネシアでは前出三案ですらバラダ・ハラハップほかの民族主義者からは全く支持されなかった上に、従来エリート教育がオランダ語により行われてきたという事実を考え合わせると、内外共に大東亜式が広まる余地はなかったと思われる。「従来の政治的な行きがかりにより英式、蘭式と分けられていた綴字法」<sup>③</sup>が、「政治的な行きがかり」により大東亜式に統一される可能性は、もとよりかなり低かったと言わざるを得ないであろう。

① 『大阪毎日新聞』奈良版、昭和七年七月三一日付(宮武家資料)。

② 『奈良茶壺』は、奈良で初めてアイスクリームを売った人、初めてカ

フエーを営業した人、という奈良近代の「はじめて物語」や、茶粥・鹿といった奈良名物についての文章から成る小冊子。北村信昭からの聞き書きが多い。

- ② 宮武正道、前掲『爪哇見聞記』、二七頁。以下本節において、ジャワ・セレベス島旅行に関し、同書からの引用である場合は、このように頁数のみを括弧内に示す。

- ③ 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』勁草書房、一九八六年、四八四頁。

- ④ 同上、四九三～四九四頁。

- ⑤ 『大和日報』昭和九年三月二日付（宮武家資料）。

- ⑥ 宮武正道『宮武正道報告第二輯 馬來語書キ日本語文法ノ輪廓』*‘Ihne Bahasa Nippon jang Ringkas’* 同、昭和一〇年五月、「出版の挨拶」。

- ⑦ 宮武タツエ編、前掲書、「はじめに」。

- ⑧ 宮武の著作では、「（蘭領）東印（度）」「蘭印」「マレー群島」のいずれかが同地の呼称として用いられていることが多いが、本稿では引用を除いてインドネシアに統一した。

- ⑨ 宮武正道『続篇 マレー語現代文ト方言ノ研究』大阪外国語学校南洋研究会、昭和一一年七月、「マエガキ」。

- ⑩ 宮武正道『大東亜語学叢刊 マレー語』朝日新聞社、昭和一七年四月、一五頁。マレー半島出身のワンチクは、大正三～一〇年に東京外語で教壇に立った後、同一一年から大阪外国語の教師となつて（昭和一三年、同編集委員会編『大阪外国語大学70年史』同刊行会、一九九二年、二八二頁）、天理外語にも出講しており（天理大学五十年誌編纂委員会編、前掲書、八四頁）、宮武はその教えを受けていた。

- ⑪ 宮武正道、前掲『大東亜語学叢刊 マレー語』、一四頁。

- ⑫ 宮武正道編『マレー語新語辞典』大阪外国語学校馬来語部南洋研究

会、昭和一三年一〇月、序。

- ⑬ 宮武正道編『日馬小辞典』岡崎屋書店、昭和一三年六月、序。

- ⑭ 「国策ノ基準」策定以降の流れは、矢野暢『南進』の系譜」（中央公論社、一九七五年）の一四六～一六一頁参照。

- ⑮ 興亜協会については、後藤乾一前掲書の第五章を参照。

- ⑯ 財団法人興亜協会編、宮武正道著、宇治武夫・ラーデン＝スジョン校閲『コンサイス馬来語新辞典 *Kanoes Baroe Bahasa Indonesia-Nippon*』愛国新聞社出版部、昭和一七年三月、「本辞典刊行の辞」。

- ⑰ 蘭田頭家・宮武正道『標準マレー語講座』第一巻、横浜商工会議所、昭和一七年一月、「著者序文」。

- ⑱ 統治学盟編『標準馬来語大辞典 *Kanoes Bahasa Mertjoe (Indonesisch)-Nippon jang lengkap*』博文館、昭和一八年七月、序。この序には、同書は「時の外務大臣松岡洋右閣下の徳遵に依り統治学盟が編纂に着手し」たとあるが、宮武タツエ前掲書の「はじめに」にも、「松岡外相の秘書のK（註）外交官の加瀬俊一カ」という人が東京から来て、マレー語大辞典を出版致したく東京外大に話したら奈良の宮武の協力がなければ役に立つ辞典が書けぬとの事、是非協力して欲しい」と依頼され、宮武は喜んで引き受けた、という事情が記されている。

- ⑲ 宮武正道、前掲『南洋パラオ島の伝説と民謡』、「はしがき」追記。例えば同追記では、「本書に用ゐる名詞の後にわ言語の発音を示すことにしたが、其のローマ字の使用法について少しばかり説明しておこ」のように表記されている。

- ⑳ 安田敏朗、前掲『帝国日本の言語編制』、三六八頁。

- ㉑ 宮武はそのままのタイトルの論文を、雑誌『太平洋』第五巻第七卷（昭和一七年七月）に発表している（安田敏朗、前掲『近代日本言語史再考——帝国化する「日本語」と「言語問題」——』、六四頁）。

- ㉒ 宮武正道『ヤシノ ミズノ アジ』カナモジカイ、昭和一七年六月、

「ハシガキ」。カナモジカイは、大正九年実業家山下芳太郎が結成した仮名文字協会を前身とするカナの国字化を訴える団体で、同一年より機関誌『カナノヒカリ』を刊行した(平井昌夫著・安田敏朗解説『国語国字問題の歴史』三元社、一九九八年、二三六―二三七頁)。

<sup>23</sup> 安田敏朗、前掲『帝国日本の言語編制』、三六九頁。カナモジカイは、日本及び植民地での「国語」と普及用の簡易化されたものを分けて考える点で、「内外分離」派団体の一つと言える(安田敏朗『「国語」の近代史——帝国日本と国語学者たち——』中央公論新社、二〇〇六年、一六一頁)。

<sup>24</sup> 南方年鑑刊行会編『南方年鑑 昭和十八年版』(東邦社、昭和十八年)に掲載されている「種族別人口統計表(一九三〇年度国勢調査)」によると、ジャワ族は二六八四万人でジャワ全島の人口の三分の二を占め、同じくジャワ島のスンダ族は八四六万人を数える(八四二―八四五頁)。

<sup>25</sup> 英国式採用案は、昭和九年頃マレー語新聞『フワルタ・デリー』

## おわりに

大東亜式のプロトタイプである「東亜式ローマ字」案が掲載された『大東亜語学叢刊 マレー語』(朝日新聞社、昭和七年四月)において宮武は、マレー語圏(図1)の広さについて、

現在マレー半島、北ボルネオおよび東印度(スマトラ、ボルネオ、セレベス、ジャバ、其他)でニューギニヤ、テルナテ、ティドレ島等の土着人の固有言語を除いた他は全部インドネシア語系(註―インドネシア語派)である。ニューギニヤやテルナテ等の言語はインドネシア系ではなくとも、其地方の土着人でかなり知識のある連中はマレー語を話す。そればかりでなくオーストラリア近海のアル―島其他真珠貝採取地でもやはりマレー語が共通語として使用されてゐる。従つてマレー語は現在南洋のエスペラント語と言ひ

(スマトラ島メダン)が唱えたもので、蘭式表記のoeを英式表記のuに変えるところから始め、最終的には全ての綴りを蘭式から英式に改めようとする案。日本留学生式案は、昭和一〇年頃大阪帝国大学工学部に留学していたステイビヨ・チコロセンチコ(チコロノロ)により提唱され、在日インドネシア留學生の支持を得たもので、労力を節約した「純粹のインドネシア式」という点を売りとし、蘭式のrをc、djをj、ngをq、njをv、jをy、oeをuとする案。エジャアン・ヌサンタラ式案は、スナリオ・スナリオウイジョヨが昭和十二年三月の文学雑誌『ブージャンガ・バル』(ジャカルタ)に発表した、蘭式のrをc、djをj、chをq、oeをu、wをv、ksをx、jをy、auをwとする案である(宮武正道『南洋の言語と文学』湯川弘文社、昭和一八年四月、九七―一〇七頁)。

<sup>26</sup> 同上、一〇七―一一一頁。

<sup>27</sup> 同上、一〇六頁。

<sup>28</sup> 同上、二〇頁。

うるのである（六頁）。

と述べ、「マレー語はエスペラント語と同様の国際語の一種であつて、他の民族言語とは全く違つた所がある」（序）としている。宮武の中で、エスペラントとマレー語は、「国際語」という定義により結びついていたようである。また『言語と文学』では、「現在マライ語はマライ半島及び東印度の共通語（エスペラント）となつてゐる」（八六頁）という表現も見られる。

既出の如く「それが言語である以上ファッシズムの宣伝にも、商店の広告にも使用されるだらう」と述べ、「そのなかにいかような考え方をも吸収してしまふ」<sup>①</sup>エスペラントの「中立性」を看破していた宮武は、エスペラント自体へ思想や主義が持ち込まれることを嫌悪したが、旧宗主国や華僑などの言語が流入して「ゴモクズシ」の観を呈するマレー語に、日本語という具材を混ぜ込むことには、同じ「国際語」という定義の下、実に無頓着であつたようである。

綴字の統一とともに必要なことはマライ語にない言葉を補充することである。マライ語では必要な語であつて無いのが沢山ある。例へば推薦するというが如き語がない。従つて出版文化協会推薦書籍などとはいえない。従来こんな場合マライ半島では英語、東印度ではオランダ語をまぜてどうにか用を足していた。今後はこの種の言葉は日本語になり推薦書はキタブ・スイセン (kitab swisen) といつたことになるのであらうか？<sup>②</sup>

『言語と文学』出版後も、後のインドネシア初代大統領スカルノ Sukarno が来寧した際は通訳を担当（昭和一八年一月）し、奈良県よりマレー語担当の通訳事務を嘱託される（同一九年七月）など、宮武へのマレー語専門家としての待遇は続いたが、「昭和十九年、世を挙げて馬來語熱が昂揚しているとき、宮武君は『今頃から馬來語などやり始めても何にもならぬ』とうそふいて」、タガログ語の辞書編纂に取り掛かつていたという。宮武家資料には、辞書編纂のため石濱純太郎から借用した Charles Nigg, *A Tagalog English and English Tagalog dictionary* (Manila, 1904) の写真複製が、確かに保存されている。しかし、それが未だ完成しない昭和一九年八月一六日、元来蒲柳の質であつた宮武は自宅で病死し、三

二年の生涯を閉じる。宮武が「にぶき良心」によって、タガログ語やジャワ語——昭和一三年『ジャバ語文法概略』を編集——といった東南アジアの民族語の研究へと邁進する姿勢の根底にあったのが、切手蒐集と同じエキゾティズムに過ぎないとしても、大東亜共栄圏内では「現地ニ於ケル固有語ハ可成之ヲ尊重スル」という方針を一度打ち出した日本政府からすれば、その営為は実に都合よく映ったであろう。「今日でいうノンポリであったらしい」と評され、かつて「ジャワで日本人資本のマライ語の新聞社を始めたい」という夢を持っていた「語学道楽」宮武を、戦時の社会は「マライ語の先生」と認めて離さず、表舞台から退場させることはなかったのである。<sup>⑦</sup>

- ① 安田敏朗、前掲『近代日本言語史再考——帝国化する「日本語」と「言語問題」——』、二八〇頁。
- ② 宮武正道、前掲『南洋の言語と文学』、八六―八七頁。
- ③ 北村信昭、前掲『エラケツ君の思い出』、二五頁。石濱純太郎も、宮武のタガログ語辞書編纂に言及している(宮武タツエ、前掲書、四七頁)。
- ④ 安田敏朗、前掲『国語』の近代史——帝国日本と国語学者たち——』、一五〇―一五一頁。
- ⑤ 宮本正男、前掲『長谷川テルの生涯とその時代——編者まえがき』、一二頁。
- ⑥ 宮武正道・左山貞雄編『インドネシア・バルー——新生東印度人の叫び——』湯川弘文社、昭和一九年一月、序。
- ⑦ 宮武には『南洋文学』(弘文堂書房、昭和四年五月)や『マライ語童話集』(愛国新聞社出版部、昭和一八年九月)などマレー文学に関する著作もあるが、本稿では触れることが出来なかった。他日を期したい。

謝辞 宮武家資料の閲覧に際しては、奈良市立史料保存館の山上豊氏・桑原文子氏と、奈良市文化財課の岩坂七雄氏にいろいろと便宜を図って頂いた。特に資料の存在をご教示下さった山上氏より受けた学恩は計り難い。末筆ながら記して感謝申し上げます。

(京都大学人文科学研究所)

Miyatake Masamichi, 'A Dilettante Linguist':  
The Life of a Highbrow in Imperial Japan

by

KUROIWA Yasuhiro

Miyatake Masamichi, a linguist from Nara, had been considered an expert on Malay, but an examination of the sources owned by Miyatake during his life clearly reveals the following trail of "linguistic amusement" (a dilettantish study of various languages) that he traveled before arriving at the study of Malay. His enthusiasm for Esperanto, which arose as an extension of his interest in stamp collecting during his middle-school years, led to the founding of the Esperanto Society of Nara and the birth of *El Nara*, the organization's publication. Miyatake consistently viewed Esperanto as simply a social tool, and he recorded many folk tales he heard from Ngiraked, an exchange student from Palau who participated in the society's meetings, and published them as *Nan'yō Parao tō no densetsu to min'yō* (Legends and folk songs of the South Sea Island of Palau) in Japanese. During this period he was inclined toward ethnography, but after his visit to Indonesia in July of 1932 (Shōwa 7), Miyatake began his full-fledged study of the Malay language. He first set his sights on reading Malay newspaper and magazines, but as the influence of the Japanese government's policy of southward advance began to be felt in the Malay language sphere, he proposed the use of the Japanese *kana* syllabary and reform of the use of Romanization to conform to Japanese usage. The dilettante Miyatake had thus came out of his study and in to the field, but he died before his final work, a dictionary of Tagalog, could be completed.